一般社団法人
日本メディア英語学会

Japan Association for Media English Studies (JAMES)

第 15 回(通算第 67 回)年次大会

2025 年(令和 7 年) 9 月 28 日(日)

The 15th Annual Convention

September 28, 2025

予稿集
Abstracts

会場: 愛知淑徳大学
星が丘キャンパス

〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘 23

学会事務局: office@james.or.jp
学会ウェブサイト: https://james.or.jp/

ご挨拶

一般社団法人日本メディア英語学会第 15 回年次大会(旧 社団法人日本時事英語学会 通算第 67 回年次大会)を愛知淑徳大学星が丘キャンパスにおいて開催できることを会員の皆さまとともに喜びたいと思います。今回の大会テーマは「メディア・ことば・バリエーション」です。基調講演者として太田一郎鹿児島大学名誉教授をお迎えし、「メディアとことばのバリエーション」と題する社会言語学的なご講演をいただくこととなっております。また、9 件の研究発表、4 件の分科会発表を 3 会場に分かれて実施いたします。会員の皆さま、また本学会の活動に興味を持ってくださっている皆さま、是非ふるってご参加ください。

旧日本時事英語学会が日本メディア英語学会と改称し、今回が第 15 回の年次大会となります。かつて我が国では、数え 15 歳(満 14 歳)の齢に将来の決意を明らかにし、大人になるための心構えを持つために儀式を行っており、それを「元服」と呼び、現在では中学校で「立志式」を行っているところがあります。本学会も「日本メディア英語学会」となってから 15 年となりますので、人間に例えればまさにこの時期にあたります。今後、立派に成熟した学会となり、ますます充実した学会となっていくためには今の時期はとても大切な時期となります。

そして、本学会には前身となる日本時事英語学会からの伝統もあります。例えてみれば親世代からの財産のようなものでしょうか。現在、私の手元にはお世話になった先生から譲り受けた雑誌『時事英語研究』(研究社) のバックナンバーがあります。今から 58 年前となる 1967 年 10 月号を紐解いてみると、「日本時事英語学会第九回年次大会」のプログラムが掲載されています(72-73)。それによると学会は 1967 年 10 月 7 日(土)、8 日(日)と 2 日間にわたって九州大学文学部で開催され、第一日は総会に続き、第一室から第五室に分かれ 5 つのテーマのシンポジアムが行なわれております。第二日には、午前中には第一室から第七室に分かれ計 28 件の研究発表が行われ、その後 12 時から 14 時 30 分にかけて午餐会(会員の自己紹介と学会に対する意見発表)が何と 2 時間半行われています。その後、全員記念撮影があり、最後に特別講演があるという充実した内容になっているようです。ここでシンポジアムや発表の内容についてつぶさに見る紙幅はありませんが、本当に多岐にわたる内容となっています。ボリュームにおいては、親世代の日本時事英語学会に遠く及びませんが、発表内容が多岐にわたっているという伝統は日本メディア英語学会に引き継がれています。

末筆となりましたが、今回、素晴らしい会場をご提供していただく愛知淑徳大学、そして大会実行委員の皆さまには深く感謝を申し上げます。参加された皆さまの充実した研鑽の場、成長の場、懇親の場になることをお祈りしご挨拶とさせていただきます。

2025 年 9 月 28 日

一般社団法人　日本メディア英語学会

代表理事　山内　圭

一般社団法人日本メディア英語学会　第 15 回(通算第 67 回)年次大会
テーマ：　メディア・ことば・バリエーション

9:30-	**受付：５号館３階 Study Hall（53A 教室前）** 会費(昼食交流会費含む)：　会員 2,000 円、非会員 3,000 円、学生(会員・非会員問わず)1,000 円 ただし、開催校の教職員および学生は無料です。 会費は当日受付にて現金でお支払いください。 ＊大会当日の年会費の支払いは受け付けておりません。		
研究発表・ 実践報告Ⅰ	53C	53B	53G
	＊PC の接続確認は、この時間に適宜行ってください。		
10:00 -10:30	【分科会発表・研究発表】 ニュース翻訳における三極評価モデルの提案：翻訳判断の可視化に向けて 金井 啓子（近畿大学） 吉田 国子（成城大学） 南津 佳広（大阪電気通信大学） 春木 茂宏（近畿大学）	【研究発表】 『クレイマー、クレイマー』における新自由主義的イクメンの視覚的表象の分析―社会記号論(social semiotics)を援用して― 稲永 知世（佛教大学） 司会：石上 文正	【研究発表】 ラグビーにおける日英通訳者確保の重要性 松見 誌野（名古屋外国語大学） 司会：畠山 由香子
10:40 -11:10	【実践報告】 建築に特化した教材を使用した英語授業の試み 恒安 眞佐（芝浦工業大学） 司会：南津 佳広	【研究発表】 アメリカ大統領による戦争開始演説における話法の比較分析 藤本時子(近畿大学工業高等専門学校) 司会: 石上 文正	【実践報告】 Using Issue Logs and Linked-skills Activities to Improve L2 Interactional Skills 小野田 榮（順天堂大学） 司会：畠山 由香子
11:20 -12:20	**基調講演**（53A） 「メディアとことばのバリエーション」 講演者：太田　一郎（鹿児島大学名誉教授） 司会：井上　彩（愛知県立芸術大学）		
12:30 -14:00	**昼食交流会**（5 号館 4 階　交流ラウンジ East） ＊ 賛助会員からの案内、各分科会の紹介 ＊創業 300 年以上の歴史を誇る名古屋の老舗店「八百彦本店」から、 名古屋名物を味わえるお弁当をご用意いたします。		

研究発表・実践報告Ⅱ	53C	53B	53G
14:00 -14:30	【分科会発表・特別発表】 「政治の物語」論の生成と展開 ―Philip Seargeant 氏の議論と兵庫県知事選挙の報道を踏まえて― 宮崎 康支（関西学院大学） 冨成 絢子（北海道大学）	【分科会発表・実践報告】 新語・語法研究分科会実践報告 三田 弘美（口語英語研究所） 田中 満佐人（オフィス田中）	【研究発表】 なぜそれがニュースなのか－日本発ストレート記事に見る”ナットグラフ”的機能 立川 智之（共同通信社海外部） 司会：宮原 淳
14:40 -15:10		【研究発表】 時事英語における高頻度連語の抽出と特徴分析 山本 五郎（法政大学） 司会：吉原 学	【研究発表】 インスタグラムに使われる月名を含むハッシュタグについて 山内 圭（新見公立大学） 司会：宮原 淳
15:20 -15:50	【分科会発表・研究発表】 英語公用語化を考える―米誌 *Scribner's Monthly* に見る森有礼の簡易英語採用論 武藤 輝昭（関西外国語大学）	【研究発表】 テキストマイニングによるニュース英語のキーワードとその共起語の分析 原 功（中央大学） 佐藤 文子（中央大学） 司会：吉原 学	

・実践報告・研究発表とも、発表 20 分＋質疑 10 分です。質問は発表内容に関連するもののみとし、手短にお願いします。質問者の意見の陳述はご遠慮ください。

・分科会発表には司会はつきません。分科会のほうで適宜進めてください。

・発表と発表の間の 10 分間は、出入室のための時間です。移動はすみやかにお願いします。

［53A, 11:20-12:20］

基調講演

メディアとことばのバリエーション

太田 一郎 先生（鹿児島大学名誉教授）

「ことば」は人と社会のインターフェイス（接触面）であり，方言，若者ことば，おネエことばなど私たちが日ごろ触れる多様なことばには，私たちの周りにあるさまざまな問題が映し出される。とくに現代社会では，ことばとメディアが深く関わることで事態はさらに複雑化する。マンガ，アニメ，ドラマなどメディア作品のことばは，人びとが認識する人と社会のあり方を常に維持したり作り替えたりしていく。このようなことばに反映される人と社会の問題について，言語イデオロギー，指標性，メディア化，レジスターの登記，など近年の社会言語学研究の重要な概念を手がかりにして，記号システムとしての言語変異のはたらきを中心に考えてみたい。

【講師略歴】

1959 年福岡県生まれ。専門は社会言語学。1988 年鹿児島大学教養部助手に着任，1997 年法文学部助教授に配置換えののち，2003 年法文学部教授。現在鹿児島大学名誉教授。1990-1992 年エセックス大学（英国）で在外研修。主な著書・論文等に『生きたことばをつかまえる』，『方言学』，『はじめて学ぶ社会言語学』，The media influence on language change in Japanese sociolinguistic context, メディアの中の方言 ： テレビドラマのコードスイッチング, Sociophonetics and Japanese など。

［53C, 10:00-10:30］

分科会発表・研究発表

ニュース翻訳における三極評価モデルの提案：翻訳判断の可視化に向けて

金井啓子（近畿大学）・吉田国子（成城大学）・
南津佳広（大阪電気通信大学）・春木茂宏（近畿大学）

英日ニュース翻訳において、翻訳者は文脈的適切性、訳出の目的達成、そして倫理的責任という３つの要求のあいだで、常に複雑な判断を迫られている。従来の翻訳研究では、国際ニュース翻訳の実態（Bielsa & Bassnett, 2009）や編集的翻訳の役割（Schaffner, 2012）が論じられてきたが、こうした競合的要求のあいだに生じる緊張関係を体系的にモデル化した枠組みは存在しない。

本研究では、翻訳評価を「文脈的適切性（Contextual appropriateness）」「目的志向性（Skopos orientation）」「倫理的配慮（Ethical consideration）」という３つの評価軸の動的関係として捉える「CSE 三角モデル」を提案する。このモデルは、Chesterman（2001）の翻訳者倫理論を援用し、従来の翻訳評価において中心的であった「文脈的適切性 vs 目的志向性」という二項対立に対し、翻訳者が社会的・文化的文脈に応じて行う倫理的配慮という第三の軸を加えることで、翻訳判断を三つの評価軸の相互関係として捉える評価モデルを提示するものである。具体的には、“war on Harvard University”の翻訳において、「ハーバード大学に対する戦争」（文脈的適切性重視）、「ハーバード大学との対立」（目的志向性重視）、「ハーバード大学への批判」（倫理的配慮重視）といった訳語の選択により、翻訳判断の重心は三角形内の異なる位置に配置される。

本モデルは、翻訳評価における多元的判断基準を 3 つの評価軸から整理し、その相互関係を可視化する分析枠組みを提供する。この枠組みを翻訳教育に応用する場合、学習者が訳語選択の根拠を検討し、評価軸の優先づけを省察するツールとしての活用も期待される。

参考文献

Bielsa, E., & Bassnett, S. (2009). *Translation in global news.* Routledge.

Chesterman, A. (2001). Proposal for a hieronymic oath. *The Translator, 7*(2), 139-154.

Schaffner, C. (2012). Rethinking transediting. *Meta, 57*(4), 866-883.

［53B, 10:00-10:30］

研究発表

『クレイマー、クレイマー』における新自由主義的イクメンの視覚的表象の分析―社会記号論（social semiotics）を援用して―

稲永知世（佛教大学）

本発表は、社会記号論（social semiotics; Kress & van Leeuwen, 2021 など）に依拠しながら、映画『クレイマー、クレイマー』（原題：*Kramer vs. Kramer*）における主人公テッド・クレイマーがケア労働（育児労働や家事労働など）に関わっている視覚的表象を分析し、テッドによるケア労働が視覚的表象においても「新自由主義的な考え方を後押ししている」（関口, 2023, p. 84）のか否かを考察する。

当該映画は、これまで、「非イクメンであった男性が反省をしてイクメンへと成長する物語」（河野, 2022, p. 254）と位置付けられてきたが、関口（2017）は、当該映画を含めた、20 世紀後半のアメリカにおける「イクメン」の文化的表象とその歴史的背景を批判的に検討することにより、「『イクメン』の言説が自己責任の名のもとに新自由主義と手を組み、ジェンダー・人種・階級といった境界線を結果的に再強化していることを明らかに」（p. 184）している。そして、関口（2023, p. 84）は、小説版と映画版を比較しながら、映画版が「『子育ては社会ではなく個人が行うべきもの』という新自由主義的な考え方を後押ししている」と指摘している。

そこで、本発表は、社会記号論を援用し、「公的な領域と私的な領域の分かちがた」（関口, 2017, p. 189）いものとなっている場面（たとえば、テッドが自宅で仕事をする場面、テッドが元妻ジョアンナ・クレイマーの写真などを片付ける場面から職場のオフィスの場面への切り替わり、など）の視覚的表象を分析し、これらの分析から、テッドのケア労働に潜んでいる新自由主義的な世界観を読み解いていく。

参考文献

河野真太郎（2022）『新しい声を聞くぼくたち』講談社.

関口洋平（2017）「『イクメン』の誕生と新自由主義―20 世紀後半アメリカにおける白人中流階級の父親の表象について―」『アメリカ研究』50 号, 183-203.

関口洋平（2023）『「イクメン」を疑え！』集英社.

Kress, G. & van Leeuwen, T. (2021). *Reading Images: the Grammar of Visual Design* (3rd ed.). Routledge.

［53G, 10:00-10:30］

研究発表

ラグビーにおける日英通訳者確保の重要性

松見誌野（名古屋外国語大学）

2019 年 9 月 20 日から 11 月 2 日までの約 40 日間、アジア初の開催となるラグビーワールドカップ（RWC）が日本で開催された。プール戦上位 2 チームが準々決勝へ進出し、準決勝、決勝へと勝ち進む RWC において、記者会見での通訳者の存在は不可欠である。2019 年 RWC 出場の全 20 チームのうち、英語が母語または公用語であるチームはアイルランド、スコットランド、サモア、ニュージーランド、南アフリカ、ナミビア、カナダ、イングランド、トンガ、アメリカ、ウェールズ、オーストラリア、フィジーの 13 カ国だった。プール A で参加した日本代表チームの指揮官、ジェイミージョセフヘッドコーチもニュージーランド出身の英語母語話者である。このことからも, イングランド発祥のラグビーというスポーツの国際大会が日本で開催される際には、とりわけ日英通訳者の確保が重要であると言える。日本経済新聞は大会開催期間中、選手や監督の話す特有の訛りのある英語を理解することの難しさに触れ、スポーツ現場の「通訳力」の改善が急務であると報じている（日本経済新聞、2019.10.12）。本発表では、RWC2019 日本大会の試合終了後記者会見を分析し、日英通訳者確保の重要性及び選手や監督の話す英語の多様性について考察する。

参考文献

日本経済新聞電子版「スポーツ現場の「通訳力」」https://www.nikkei.com/article/DGXMZO50947030S9A011C1UU1000/（2019 年 10 月 12 日）

［53C, 10:40-11:10］

実践報告

建築に特化した教材を使用した英語授業の試み

恒安眞佐（芝浦工業大学）

発表者は共同で大学生向けの建築分野に特化した英語教材を２冊作成した。本発表では、建築英語に関する授業の概要と進め方を概観し、その後、教科書の構成を説明する。その教科書を使用して実践された授業活動を紹介し、学生の反応を考察する。最後に授業の振り返りと今後の課題を報告する。

本教材は建築を専門とする大学生のための英語学習テキストで“Basic English for Architecture”と呼ばれる。学習者のターゲットとしては、TOEIC400 点～500 点レベルを設定している。１冊目は “Speaking and Listening[1)] ”で建築系の実務で必要な語彙の修得と表現を中心とした 12 ユニットで構成されており、全ユニットを通じて、一つのプロジェクトチームが建築・建築工学・都市計画・環境などに関連する会話をしていく設定で組まれている。各ユニットの最後のセクションには GOOD TO KNOW と呼ばれる短い読み物が入っており、コミュニケーションや建築の「豆知識」的な内容となっている。２冊目は “Reading and Writing[2)] ”で、Reading Section と Writing Section に分かれている。Reading Section は、建築分野のトピックを扱った文章を通じて、基本的な建築の語彙強化と読解力を身につけることを目指している。Writing Section は、基本的な段落の書き方から、３段落そして最終的には複数の段落で構成されたエッセイが書けるよう段階的に力をつけていく。教科書の内容は建築を専門とする教員の助言をいただき、演習問題や教科書の構成などは英語教員が担当した。次に授業内で試みた活動を紹介する。建築学部の特色を踏まえた英語サポートに焦点を当てるよう心掛けた。まず建築の専門用語と基礎知識を英語で学び、その知識を利用して「考えさせる」授業へと展開した。また、アウトプットとインプットの機会が豊富なペアやグループ活動を取り入れ、学生にとって飽きのこない授業を試みた。英語のレベルが違う学生が在籍する授業での学生同士の協同学習を意識した実践活動を紹介する。最後は学習者アンケートの結果と今後の課題で本発表を締めくくる。

参考文献

１）ホートン広瀬恵美子, 恒安眞佐, セシリア藤島スミス, 神谷英子, ロエベル猪野万季子. “Basic English for Architecture Listening and Speaking―建築を学ぶ人のための総合英語リスニング&スピーキング”. 南雲堂. 2018.
２）ホートン広瀬恵美子, セシリア藤島スミス, 恒安眞佐, 神谷英子, パネルジャスティン, ホートン広瀬レイナ. “Basic English for Architecture Reading and Writing―建築を学ぶ人のための総合英語リーディング&ライティング”. 南雲堂. 2019.

［53B, 10:40-11:10］

研究発表

アメリカ大統領による戦争開始演説における話法の比較分析

藤本時子（近畿大学工業高等専門学校）

本発表は、アメリカ大統領による戦争開始演説をメディア英語の視点から分析する。具体的には、1917 年のウッドロー・ウィルソンの第一次世界大戦参戦演説と、2003 年のジョージ・W・ブッシュによるイラク戦争開戦演説を比較対象とする。いずれも当時の大統領によってメディアを通じて国民に広く届けられた、極めて重要な政治的メッセージである。両演説は、戦争という困難なテーマに対して国民の支持を獲得する目的で発せられたものであり、その言語使用やレトリックは、公共メディア上での説得戦略として高度に構築されたものである。なぜなら、戦争演説は日常的な平和を享受している国民に向け国家の武力行使を正当化し、理解と同意を求めるという点で、極めて強い説得性と信頼性が要求されるからである。本発表では、こうした演説におけるメディア言語表現や修辞的構造に着目し、両大統領がいかにして当時のメディアを用いて自らの信条と国家の立場を語り、戦争への支持を得たかを明らかにする。

先行研究では、ウィルソンが「アメリカ例外主義(American exceptionalism)」に基づき、道徳的かつ理念的な国際秩序の構築を訴えた一方、ブッシュはアメリカの安全保障を最優先に据えた現実主義的アプローチを取ったことが指摘されてきた。本発表では、両者の基本的信条の違いに加え、マスメディアにおける演説の構成やフレーミングの設定の違いにも注目し、メディア英語による戦争レトリックの特徴を浮き彫りにする。

最終的には、戦争レトリックが単なるプロパガンダではなく、メディア空間において平和を再構築するための手段としても機能し得るという点に着目し、受け手がその言説をどのように受容・評価するかという視点も交えて考察を行う。また、本研究発表は、現代国際社会における報道と政治的言語の相互作用を理解するうえでの一視座を提供するとともに、メディアを介した説得言語の分析が、政治的危機におけるリーダーシップの在り方や、公共的コミュニケーションの功罪を考える手掛かりとなることを示す。

参考文献

Flanagan, Jason C (2004). "Woodrow Wilson's "Rhetorical Restructuring": The Transformation of the American Self and the Construction of the German Enemy." *Rhetoric and Public Affairs* vol. 7, No. 2. 115-148. (https://www.jstor.org/stable/41939905)

Flanagan, Jason C (2009). *Imagining the Enemy: American Presidential War Rhetoric from Woodrow Wilson to Jason George W. Bush.* California: Foreign Affairs and International Security.

Lipe, Jonathan (2007). "The Wartime Rhetoric of Bush and Wilson." *American University Digital Research Archive.* (https://dra.american.edu/islandora/object/0708capstones%3A231)

R. Priore, Jennifer (2008). "Listen Carefully : A Rhetorical Analysis of Speeches Delivered by President George W. Bush." *Montclair State University.* (https://digitalcommons.montclair.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=2240&context=etd)

藤本時子 (2025)「ウッドロウ・ウィルソンの第二回大統領就任演説における修辞技法」近畿大学工業高等専門学校研究紀要 18 (pp.111-117)

［53G, 10:40-11:10］

実践報告

Using Issue Logs and Linked-skills Activities to Improve L2 Interactional Skills

ONODA, Sakae（順天堂大学）

This presentation will show how issue log tasks, a type of pair work, combined with linked-skills tasks, help learners build rapport and enhance their English skills, especially oral fluency and interactional skills. In an issue log activity, learners working at home read an article on a contemporary issue they are interested in, write a summary of it, and add two discussion questions. Then in class, they form pairs, read and discuss their summaries and discussion questions, and listen to each other's reports attentively and respond to them critically. The process is repeated three times with a different partner to preclude learners becoming bored or apathetic about the activity.

According to Newton and Nation (2021), issue-log and linked-skills activities belong to the fluency development strand, a critical component of the "four strands of teaching" approach purported to improve communication skills but rarely implemented in language classes around the world. Research as well as the presenter's own experience show that employing issue log tasks for an extended period at university level helps learners improve the willingness to communicate, critical thinking skills, oral fluency, and self-efficacy. When finely tuned to the learners' proficiency and intellectual and motivational levels, intensive use of such tasks helps learners achieve the three important goals of L2 learning: linguistic, affective, and social. The skills thus enhanced are critical for users of English in today's global society. The presenter will explain the features of issue log and linked-skills tasks along with their theoretical underpinnings, learner involvement, and learner feedback on their performance, including perceived pedagogical benefits. If time permits, the presenter will show a video of learners' performance to give participants a feel for how learners engaged in a typical task.

Reference

Newton, J. M. & Nation, I. S. P. (2021). *Teaching ESL/EFL Listening and Speaking*. Routledge.

［53C, 14:00-15:10］

分科会発表・特別発表

「政治の物語」論の生成と展開
―Philip Seargeant 氏の議論と兵庫県知事選挙の報道を踏まえて―

宮崎康支（関西学院大学）・冨成絢子（北海道大学）

メディア英語談話分析研究分科会では、2024 年よりイギリスの言語学者 Philip Seargeant 氏の著作 *The Art of Political Storytelling* (Seargeant, 2020) の翻訳・精読を行っている。同書は、アメリカのドナルド・トランプ大統領（同書出版当時は第一期）などの事例を基に、政治家の言葉による「政治の物語」の形成を論じたものである。刊行から 5 年が経過しているが、ソーシャルメディアの普及などによって、本書が指摘した「ポスト真実」の状況はますます顕著になってきているとも考えられる。そして、この状況は日本においても発生しているのではないだろうか。

そうした問題意識を基に、まず Seargeant (2020)の主な論点を紹介する。続いて、日本におけるこの議論の応用可能性を探るべく、2024 年兵庫県知事選挙をめぐる報道の批判的談話研究を 2 件提示する。1 件目の報告は、ナショナルおよびグローバルな観点から、『読売新聞』、『朝日新聞』、そして *The Japan Times* における関連報道の分析を紹介する。2 件目の報告は、ローカルな観点から、兵庫県の地方紙である『神戸新聞』における関連報道の分析を提示する。これらの報告を踏まえ、全体討議を行う。

この選挙は奥山俊宏 (2025)が示したように、内部告発文書問題をめぐる知事の不信任と再出馬という特異な経緯も相まって情報戦の様相を呈した。その中における情報流通のあり方が政治言説構築に及ぼす影響を明らかにしたい。

参考文献

奥山俊宏. (2025). 「兵庫県知事選に際してのデマや個人攻撃の事例: ある関係者の経験とそれに基づく試論」.『コミュニケーション研究』, (55), 19-47.

Seargeant, P. (2020). *The Art of Political Storytelling: Why stories win votes in post-truth politics.* London: Bloomsbury.

［53B, 14:00-14:30］

分科会発表・実践報告

新語・語法研究分科会実践報告

三田弘美（口語英語研究所）・田中満佐人（オフィス田中）

新語は、個人の心理的変化、社会構造や文化の変化、そして言語体系そのものの変化によって生み出される。既存語では表現しきれない概念や、より的確な言葉が求められるとき、新語の創出は不可欠となる。こうした要因が相互に作用することで、新語が誕生し、言語表現の幅が更新されていく。新語研究は、語の構造や形成メカニズムを分析することで、言語の進化と社会的変化を読み解く手がかりとなる。

新語・語法研究分科会は、1959 年に設立された日本時事英語学会（日本メディア英語学会の前身）において 1995 年に発足した。以降、年 6 回の例会を重ねてきたが、コロナ禍以降は回数を減らし、ハイブリッド形式で年 3 回開催してきた。2025 年度からは参加者の利便性に配慮し、より多くの方々にご参加いただけるよう、Zoom のみでの開催を予定している。

本報告では、2024 年 2 月から 2025 年 6 月にかけて分科会で報告された語彙のうち、時事性や語用的意義を有する語を抽出し、その観察と記録を試みる。はじめに、新語の定義および造語法（混成・短縮・派生・転用など）を簡潔に概説する。続いて、各語の初出時期や出現背景を探り、使用事例をもとに語の運用が示す言説的傾向を考察する。さらに、語の意味変化や社会的文脈との関係にも着目し、実態に即した視点から報告を行う。以下に、本報告で扱う新語とその語義を示す。

- **Boomerocracy** 「ベビーブーマー世代の支配、団塊世代支配」
- **hypertourism** 「オーバーツーリズム、過剰観光」
- **Quit-Tok** 「クイット・トック、退職動画」
- **social media detox** 「SNS 断ち」
- **digital detox**「デジタルデトックス、SNS やスマートフォンやコンピューターといったデジタル機器の使用を自発的に控えていくこと、またその期間のこと」
- **man-tox** 「男捨離」
- **dating detox** 「恋愛断ち、意図的に自分をデート・シーンから外すこと、恋愛活動を一時的に休止すること」

参考文献

Bauer, L. (1983). *English Word-Formation*. Cambridge University Press.

Crystal, D. (2003). *The Cambridge Encyclopedia of the English Language.* Cambridge University Press.

Burgess, G. (2009). *The Dating Detox*. AVON, a division of HarperCollins Publishers Ltd.

Plag, I. (2018). *Word-formation in English* (2nd ed.). Cambridge University Press.

須永, S. (1999). 英語の造語メカニズム―新語の語形成の場合. 研究会報, 16(16), 16.

須永, S. (2007). 新語の語形成の短縮傾向に関する展望. 研究会報, 40, 61–67.

［53G, 14:00-14:30］

研究発表

なぜそれがニュースなのか
―日本発ストレート記事に見る"ナットグラフ"的機能

立川智之（共同通信社海外部）

グローバル化とソーシャルメディアの進展により、東京を拠点とする英文報道機関は、日本の政治や社会の動向を、迅速かつ理解しやすい形で海外読者に発信する役割を強めている。こうした報道には単なる翻訳を超えて、「なぜそれがニュースなのか」を明示する構成が求められる。本研究は、その機能を担う要素として、英語圏の報道実務で重視されるナットグラフ（Nut Graph）に着目した。

先行研究では、ナットグラフは主に逸話型リードを用いたフィーチャー記事に現れるとされている（谷川, 2009）。そのため、事実を客観的に伝えるストレートニュース記事におけるナットグラフの役割に関する分析は、これまでほとんど行われてこなかった。本研究では、ナットグラフの機能がフィーチャー記事に特有のものなのか、それともストレートニュース記事にも見られるのかを検証した。

分析対象には、2024 年の自民党総裁選に関する共同通信の英文ストレートニュース記事を用い、ナットグラフに該当する箇所の抽出は、谷川が示した①位置的要件、②機能的要件、③内容的要件に基づいて行った。また、ストレートニュースの定義については、谷川が「前日」の出来事を扱ったものとしているのに対し、本研究では、情報流通の即時性を踏まえ、「当日」の報道を対象とした。

分析の結果、ストレートニュース記事にも文脈を補足するナットグラフ的段落が含まれていることが確認された。特に、日本の政治ニュースのように、一定程度の背景知識を持ち合わせていないと正確に内容が伝わらない記事において、ナットグラフの果たす役割は極めて重要であることが明らかになった。

本研究は、報道実務における英文ニュースの構成原理を可視化するものであり、対外発信の強化、記者教育、翻訳実務への応用など、報道と国際社会の橋渡しを支援する多面的な意義を持つ。

参考文献

谷川 幹. (2009). 英文記事における“nut graph”の役割と意義について. コミュニケーション研究, 39, 25–47. https://dept.sophia.ac.jp/human/journalism/Communications/CR-no39-tanikawa.pdf

［53B, 14:40-15:10］

研究発表

時事英語における高頻度連語の抽出と特徴分析

山本五郎（法政大学）

英語教育に関して、文部科学省の学習指導要領では、小・中・高の各教育段階での学習内容の強化が図られている。語彙学習についても、高校卒業までに必要とされる語彙数は、2020 年度以降、3,000 語から 4,000–5,000 語へと引き上げられている（文部科学省, 2019）。しかし、英語の連語表現に関しては、教育課程全体を通して明確な数値目標や指導基準が示されてこなかったのが現状である。

実践的な英語力を育成する観点からは、現代社会で共有されている価値観や生活様式、国際的な課題に対応する語彙や表現の習得が不可欠であり、連語表現についても実用英語で多用される表現群を特定し、その性質を明らかにする必要がある。これまでの連語研究では、学習者による誤用の分析（Nesselhauf, 2003; Yamashita & Jiang, 2010）、あるいは動詞と前置詞・副詞の連語表現をはじめとする高頻度構文の構造的分類（Biber et al., 2004; Hyland, 2008）に焦点が当てられることが多く、大学における教養英語科目などで学習対象とすべき実用的な連語を明示的に扱った研究は限られていた。

このような背景を踏まえて、本研究では、コロナ禍や国際紛争、経済不安など近年の社会的課題を反映した時事英語を対象とし、2021 年から 2023 年に出版された『Time』や『Forbes』など、英語圏で広く読まれているニュース・ビジネス誌を出典とする 950 万語規模の独自の時事英語コーパスを構築した。本研究では、このコーパスをもとに 2 語から 6 語までの連語の頻度上位 1,000 項目を抽出し、リスト化した上で、その構造的・意味的特徴を分析した。さらに、既存の大規模英語コーパスとの比較を行い、他の媒体においても広く使用される汎用的な連語表現と、本研究で構築したニュースコーパスに特徴的な表現との違いを明らかにする。発表では、時事英語コーパスで高頻度に出現する象徴的な連語表現の具体例を示しながら、それらの使用傾向や教育的含意についても考察する。

参考文献

Biber, D., Conrad, S., & Cortes, V. (2004). If you look at…: Lexical bundles in university teaching and textbooks. *Applied Linguistics*, *25*(3), 371–405.

Hyland, K. (2008). As can be seen: Lexical bundles and disciplinary variation in academic writing. *English for Specific Purposes*, *27*(1), 4–21.

Nesselhauf, N. (2003). The use of collocations by advanced learners of English and some implications for teaching. *Applied Linguistics*, *24*(2), 223–242.

Yamashita, J., & Jiang, N. (2010). L1 influence on the acquisition of L2 collocations: Japanese ESL users and EFL learners acquiring English collocations. *TESOL Quarterly*, *44*(4), 647–668.

文部科学省（2019）『教育政策における EBPM の強化 -外国語の抜本的強化イメージ-』

［53G, 14:40-15:10］

研究発表

インスタグラムに使われる月名を含むハッシュタグについて

山内　圭（新見公立大学）

ソーシャルメディア(SNS)の一つインスタグラム（Instagram）は、2010 年 10 月 6 日にサービスを開始し、インスタグラムの公式ホームページ（日本語版）によると、世界に「10 億人を超える利用者」がいるという。また、2011 年 1 月 27 日にハッシュタグ機能が搭載されたが、この機能により、投稿者が自分の投稿写真にジャンル付けをしたり、テーマを持たせたり、同じハッシュタグをつけた投稿（自分のものも他人のものも）を参照しやすくなった。このハッシュタグ機能はインスタグラムのみならず、X(旧 Twitter）やフェイスブック（Facebook）などでも使用されている。

今回はハッシュタグ名の検索のしやすさからインスタグラム上でのハッシュタグ名を収集し分析することとする。発表者自身のインスタグラムのアカウントを使用して各月の名を入れハッシュタグ名を検索した。インスタグラムのハッシュタグ検索では、そのハッシュタグ名を使っている投稿のおおよその数も表示される。従って各月名に関して、その中から、投稿数が多いもの、特徴的なものを選定し、件数を調べた。必要に応じて、実際にそのハッシュタグをつけられて投稿された写真や投稿文を見て、分析を行った。この研究で用いた手法は参加観察法である。

本発表では、主に月名と何らかの言葉遊びがある語が共起するハッシュタグ名を検討し、また “photoaday”(1 日 1 枚の写真の投稿)のようにどの月でも見られるハッシュタグ名などを紹介し、ハッシュタグ語の増殖や展開の様子について考察する。世界の「16 億 5 千万人を超える利用者」の考えにより無限に増殖していくハッシュタグを追っていくのは至難の業であるといえるが、裏を返せば、この現象は世界中の人々を巻き込んだ大きな「言葉遊び」であるとも言える。その中を切り口を決めて分析することにより何らかの示唆が得られるものと信ずる。

参考文献

Dorfman, Robert G., Vaca, Elbert E., Mahmood, Eitezaz, Fine, Neil A., and Schierle, Clark F. (2018). Plastic Surgery-Related Hashtag Utilization on Instagram: Implications for Education and Marketing, *Aesthetic Surgery Journal*, Volume 38, Issue 3, 332–338.

山内　圭 (2021). インスタグラムに使われる曜日名“Monday”を含むハッシュタグについて『新見公立大学紀要』42, 2, 119-126.

--- (2024). SNS インスタグラムのハッシュタグ研究―曜日名を含むハッシュタグについて―『新見公立大学紀要』45, 121-134.

［53C, 15:20-15:50］

研究発表

英語公用語化を考える―米誌 *Scribner's Monthly* に見る森有礼の簡易英語採用論

武藤輝昭（関西外国語大学）

近年、急速なグローバル化および IT 化の進展に伴い、国際的な交流や交渉、折衝などはビジネス領域にとどまらず、日常生活においても容易かつ頻繁に行われる状況となっている。こうした国際交流の場では、英語が共通言語として不可欠な役割を果たしており、コミュニケーション手段としての英語の重要性はますます高まっている。現在、英語を公用語（事実上の公用語を含む）とする国・地域は全世界で 58 カ国および 21 地域に及び、我が国においても、近年、楽天やファーストリテイリングなどの一部企業による英語の社内公用語化の動向が見られている。

本分科会発表では、英語公用語化に潜在する思想的背景や諸課題を検討し、その妥当性について論じる機会としたい。特に、本発表では、英語公用語化論の先駆者である森有礼 1847-89 の簡易英語採用論に着目し、その歴史的意義と実像について明らかにすることを目的とする。今回は森と同時代の英語メディアである米誌 *Scribner's Monthly: An Illustrated Magazine for the People* の論説を取り上げたい。同誌は 1870 年から 1881 年まで米国で発行されたイラスト入りの文学定期刊行物（1881 年に *The Century Magazine* として再創刊）であるが、森が綴字や屈折を簡易化した英語を日本に導入しようと提唱した 1873 年に“A New Language Wanted.”と題する論説を掲載している。

本発表では、同誌において森の提唱がどのように論じられ、評されたのか、という点を考察することによって、当時の英語母語話者の英語公用語化論に対する認識や態度の一端を明らかにしていきたい。

参考文献

Mori, Arinori. (1872). “To William D. Whitney.” 21 May 1872. Letter.

“A New Language Wanted.” (1873). *Scribner's Monthly: An Illustrated Magazine for the People*, Vol. 5, 770-71.

K. F. （1934）「森有礼の英語を国語とする論」英語青年第 72 巻（pp. 8-9）

川澄哲夫編（1978）「英語教育論争史」鈴木孝夫監修、資料日本英学史第 2 巻、東京：大修館書店

［53B, 15:20-15:50］

研究発表

テキストマイニングによるニュース英語のキーワードとその共起語の分析

原　功（中央大学）・佐藤文子（中央大学）

大学における英語教育に、ニュース映像を素材とした教材を用いることは珍しいことではない。大学英語教科書協会に加盟している出版社から出版されている 2025 年度の新刊教科書において、7 冊がニュース映像を素材とするものだった。ニュース映像を英語教育に用いることは、今日的なトピックを扱うために興味を持たせやすいばかりか、オーセンティックな英語に触れさせることができるため、その教材としての価値は高いものと考えられる。しかしながら、実際に授業でそのような教材を使用すると、英語が聞き取れなかったり、内容が理解できなかったりするという意見が学生たちから出ることが珍しくない。筆者らは原・佐藤(2024) および佐藤・原(2024)においてニュース映像を学生にとって適切なインプットとして提示するための手法を模索し、ニュースで使用されている語彙レベルの分析や話速の分析を行ってきた。その発展として、本研究ではテキストマイニングの手法を用い、ニュースを理解するためのキーワードの頻度が、異なるニュース間でどのように変わるのか、また、キーワードに対してどのような語が共起しているのかを分析し、ニュースの内容を理解するための「手掛かり」がスクリプトの中にどのくらいの割合で含まれているのかを示す。それにより、ニュースの全体像を理解するためのキーワードおよびその関連語の頻度と分布の違いが学習者にとってニュースを理解しやすくする要因となりえることを論じる。 テキストマイニングは、文章データ中に多く出現している単語の抽出、単語の共起パターンの把握、単語間の関係性を示すといった分析が可能で(稲田・森(2023))、新聞記事をデータベースとしてキーワードを分析する先行研究も見受けられる（市川(2016)、山田（2017））。本研究では Pollack(2019)で使われた同一トピックの複数の記事に対するテキストマイニングを、ニュース映像のスクリプトに応用しながら論考する。

参考文献

市川祐太. (2016). 「テキストマイニングを用いた新聞メディアの報道傾向検出への試み」『法政大学大学院紀要. 理工学・工学研究科編』第 57 巻

稲田愛・森裕一. (2023). 「テキストマイニングによる傾向・様相の分析」『経営とデータサイエンス』第 5 号

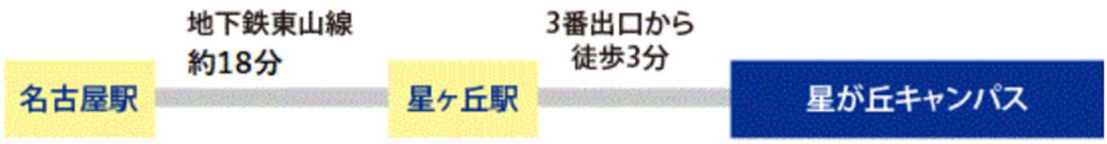
佐藤文子・原功. (2024). 「ニュース英語における句動詞ー学習者にとって適正なインプットとするためにー」. 一般社団法人日本メディア英語学会 第 14 回（通算第 66 回）年次大会

原功・佐藤文子. (2024). 「ニュース放送を学習者にとって適正な水準のインプットとするための考察」. 第 105 回 東日本地区研究例会 。

Pollak, Senja. (2009). ‘Exploratory analysis of press articles on Kenyan elections: a data mining approach’. “Proceedings of the 12th International Multiconference Information Society”. Institut Jožef Stefan

山田耕. (2017). 「新聞メディアで報じられる火山学情報のテキストマイニング解析」『火山』第 62 巻第 4 号

【愛知淑徳大学（星が丘キャンパス）への交通アクセス】



・名古屋駅より地下鉄東山線「星ヶ丘」駅まで約 18 分。

・「星ヶ丘」（3 番出口）を出て左折、大通り（東山通）を道沿いに北東方向に歩いて約 3 分。
左手側にキャンパスがあります。

【キャンパスマップ】

・会場（受付）は 5 号館 3 階です。正門から入って道なりに進み、前方のエスカレーターで【1 号館 3 階】へ向かってください。1 号館 3 階フロアからは掲示をご確認のうえ、5 号館へお越しください。

・研究発表は 5 号館 3 階の 53C, 53B, 53G；基調講演は 53A；賛助会員展示・休憩室は 53F です。

・昼食交流会は 5 号館 4 階の交流ラウンジ East です。階段またはエレベータで 4 階に移動してください。

【お願い】

1. 年次大会への参加の事前登録について

年次大会に参加される方は、以下の URL または QR コードより、事前登録をお願いします。
参加登録の締め切りは **2025 年 9 月 19 日（金）**です。

大会参加費（昼食交流会費を含む）は、会員および提携学会員が 2,000 円、非会員が 3,000 円、学生は会員・非会員を問わず1, 000円です。会費は当日受付にてお支払いください。

なお、学会の年会費については、受付でのお支払いを受け付けておりません。

https://forms.gle/3edEgauHcpYPJjkd9

2. 定時社員総会参加と議決権の行使について

今年度は、総会を年次大会とは別日に開催いたします。

■ 日時：2025 年 10 月 26 日(日)14:00～

■ 形式：Zoom によるオンライン開催

【参加確認および議決権行使について】

10 月上旬に学会 HP 上で案内される議案書をご確認の上、議決権行使書(Google フォーム)にて、第 15 回社員総会への出欠を、2025 年 10 月 23 日(木)までにご送信ください。社員総会に欠席される方は、「社員総会議決権行使書」欄へのご記入もお願いいたします。社員総会の定足数確保のため、オンラインフォームへの回答へのご協力をお願い申し上げます。

※議決権行使に関して何らかの意思表示がなかった場合には、議決権行使権限を議長に一任したものとみなしますので、ご了承ください。

【補足】

2024 年 10 月実施の第 14 回総会より、参加確認および総会に欠席される方の議決権行使は原則オンラインで実施しております。会員名簿にメールアドレスが未記載の方には、別途封書にてご案内をお送りいたします。

3. 会員登録情報の修正について

会員用メーリングリストから情報を送信しても、宛先不明で戻ってくるケースが増えています。もし、本会のメーリングリストから各種情報が届いていない場合は、本会 HP トップにある「会員情報変更」オンラインフォームより、メールアドレスの変更を申請してください。メーリングリストに登録されているアドレスを変更いたします。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

第 15 回(通算第 67 回)年次大会 運営委員会

運営委員長：福本明子(愛知淑徳大学)

運営委員：石原知英(鹿児島大学) 井上彩(愛知県立芸術大学)
樗木勇作(愛知淑徳大学) 宮原淳(岐阜聖徳学園大学)